

## 第3回ひがしおおさか地方創生ラウンドテーブル議事要旨（A班）

開催日時：2025年11月24日（月）9:00～12:00

開催場所：東大阪市役所本庁舎18階大会議室

出席者：委員20名

コーディネーター：伊藤伸氏（構想日本総括ディレクター）

### 議事概要

#### 1. 多様な「出会い」と「情報」の提供

##### 【会議で出た意見】

- SNS等の情報だけでは偏りがあるため、実際に働いている人に直接話を聞いたらネットだけで分からないことも知れるため、そのような場に行きたい。（学生）
- 職業名だけでなく、バックパッカーや研究者など、子どもが普段出会えないような多様な価値観や生き方をしている大人と触れ合う機会を、大学や地域連携で作ってほしい。
- 「話を聞きたい子ども」と「話せる大人」をつなぐ人材バンクのような仕組みや、行政がニーズを汲み取ってマッチングする機能（LINE等）があれば良いと思っている。

#### 2. 挑戦と経験の場づくり（「やってみる」機会）

##### 【会議で出た意見】

- 子どもたちが自分でやってみたい企画をプレゼンし、審査に通れば活動資金（補助金）が出るような「チャレンジ大会」を東大阪市でもやってみたい。
- 賞やコンクールもいいが、職業体験を一步前に進め、例えば市の看板デザインなどを子ども限定で公募し、採用されれば報酬が支払われる「プチ受注」の仕組みを作ること、プロからのフィードバックや実績が得られて良い経験になると思う。
- 子どもだけで仮想のまちを運営する体験イベントの話聞き、まるで文化祭みたいで楽しそうだった。ぜひやってみたい。（学生）

#### 3. 多文化共生とグローバルな視点

##### 【会議で出た意見】

- 留学や海外の情報をどこで得ればよいか分からない。もっと知りたい。（学生）
- 海外に行くだけでなく、東大阪市内に住んでいる外国人と地域の中で関わりたい。交流できる場があれば参加したい。（学生）
- 職場で外国人の同僚と接する際、互いの文化に興味を持って会話することで、単なる業務上の関係を超え、良好な関係が築けた。

- 日本語も母国語も十分に習得できていない子どもたちに対し、言語学習や学習支援を行う NPO や居場所が重要だと感じる。
- 在住外国人について、地域ではゴミ出しや騒音のトラブルもある。「郷に入れば郷に従え」と押し付けるのではなく、お互いが気持ちよく暮らすためのルールやマナーと一緒に学ぶ機会や、文化交流の場が必要だと感じている。

#### 4. 夢の変更と再挑戦

##### 【会議で出た意見】

- めざしていた道を途中で諦めなくてはいけなくなった自身の経験より、そういう事態になった時に「どうすべきか」「こういう道もあるよ」と示してくれる機会や場があるとよいと思う。
- もし希望の職業（例：消防士）になれなくても、「消防車を設計する会社」に就職することで人命救助に関わるなど、視点を変えれば夢に近づくことができると大人が示すことで、若い世代が挫折した時の心のサポートをしていきたい。

#### 5. 生活の基盤づくり（病院・街灯について）

##### 【会議で出た意見】

- 病院（救急受入）について、二次救急（重症患者優先）の役割分担や、「救急車利用の適正化」と「必要な受診」のバランスをどう取るかが課題ではないか。

#### 6. コーディネーターまとめ

- 夢は強制されるものではないが、どんな自分になりたいかが見える環境が必要だということは、グループワークにおける共通した考え方だった。
- 多くの「場・機会・情報」をどう届けるかが鍵であり、他市の先行事例や、企業・大学と連携したプ子受注の仕組みなど、非常に具体的かつ建設的なアイデアが出ている。これは提案書の中に盛り込んでいきたい。
- 前回「芸人になりたいが親に反対されている」と話していた中学生が、この1ヶ月間で父親を説得し、父親側も「子どもの権利や夢を尊重すべき」という考え方に変わって応援してくれるようになっている。この中学生のエピソードこそが、東大阪市がめざす「子どもの権利の尊重」の実践であり、大きな成果と言える。

## 第3回ひがしおおさか地方創生ラウンドテーブル議事要旨（B班）

開催日時：2025年11月24日（月）9:00～12:00

開催場所：東大阪市役所本庁舎18階研修室

出席者：委員18名

コーディネーター：林恵子氏

ナビゲーター：むんちゃん氏（虐待サバイバー）

議題：

1. 前回の振り返り
2. ナビゲーター（むんちゃん氏）の話題提供
3. 議論① 安心安全が守られない子どもへの支援
4. 議論② 子どもが夢を描くために必要なこと
5. まとめ・次回に向けて

議事概要：

1. 前回の振り返り

前回（第2回会議）までの議論をまとめた「中間取りまとめ」資料に基づき、抽出された大きく5つの課題に分類・整理した。その内容を共有し、今回の会議の進め方に関する説明を行った。

- ①子どもの安心安全が保障されていない
- ②不十分な学校教育・体験機会
- ③情報社会、ネット、SNSの悪影響
- ④地域コミュニティにおける課題
- ⑤大人たちの姿勢・声かけ

課題①の「子どもの安心安全が保障されていない」に関する意見や情報量が、他の項目に比べてまだ意見があまり出ていないという指摘があった。

- 参加者の多くにとって、虐待や絶望といった「自分が経験したことがないこと」を想像するのは難しかったのではないかと。
- そのため、今回は「親に頼れない子ども」や「安心安全が守られていない子ども」の実情を知るために、当事者（虐待サバイバー）であるナビゲーターのむんちゃん氏を招き、話を聞くことから始める。

## 2. ナビゲーター（むんちゃん氏）による話題提供

虐待サバイバーとしての経験から、親を頼れない子どもたちの現状と、夢を持つ以前の安心の重要性について話し合われた。

- 子ども時代の優先順位の違いと「当たり前」の基準の違い
  - 虐待家庭の子どもにとっての優先順位は、遊びや勉強ではなく「今日は殴られないか」「ご飯を食べられるか」「怒鳴られずに眠れるか」という生存に関わること。
  - 「家に帰れば安心できる」「困ったら助けてと言え」という、多くの人が持つ「当たり前」の感覚が欠如しており、常に緊張状態にある。
  - 安心する場所があって始めて夢を持てる。生き延びるのに精一杯で、明日も生きているのかもわからない状態では、未来を思い描けない。
- 夢を持たない心理
  - 「将来の夢」を聞かれても、今生き延びることに精一杯で未来を想像できない。親が喜ぶ答えやその場をやり過ごすための嘘を言う。
  - 「ここにいていいんだ」という安心の土台の上に夢は成り立つものであり、まずはその土台作りが必要。
- 大人や行政への提言
  - 虐待の後遺症で大人になっても働けなくなる人を減らすことは、社会全体の利益。子どもが今日生き延びることではなく「未来」にリソースを使えるようにするのが大人の責任。
  - 多くの人が思う「当たり前（家に帰れば安心、ご飯がある）」が欠落している。「助けて」と言った経験がないから、助けを求めるという発想自体が育たない。教員や地域の大人がサインを見逃さないための研修や、親を介さずに「助けて」と言える具体的な場所の明示が必要。

## 3. むんちゃん氏の講義を踏まえた議論①（安心安全が守られない子どもへの支援）

「マイナスからゼロへ」戻す支援について、市民としての葛藤や限界について意見交換。

- 市民による介入の難しさと葛藤
  - 夜遅くに公園にいる子どもなどに声をかけたくても、今の社会情勢では「変質者」や「不審者」扱いされるリスクがあり、行動に移すのが怖いという意見
  - 「おはよう。」と挨拶をただけで、高齢男性から声をかけられたという不審者情報が回る現状があり、地域コミュニティでの見守りが難しくなっている。
- 支援の対象と行政の役割
  - ネグレクト等の困難な家庭への介入は一般市民にはハードルが高く、教員も多忙であるため、専門的な知識を持ったスクールカウンセラー等や予算の拡充が不可

欠。もっと繋がりを細かくし、救われる仕組みを作ることが大切。

- 一部の困難な子どもを救うことも重要だが、行政施策としては9割以上の一般的な子どもたちをどう伸ばすかに注力すべきではないか。

➤ 「ナナメの関係」の可能性

- バスの運転手が毎日通学路の子どもに手を振るように、直接的な会話はなくても「顔見知り」の関係を作っておくことが、いざという時のSOSの出しやすさに繋がるのではないか。親や先生には言えないことを、近所のおじさんやおばさんになら言えるかもしれない。そういう「ナナメの関係」を作れる場が必要。

4. 議論②（子どもが夢を描くために必要なこと）

「ゼロからプラスへ」伸ばすための具体的な施策について、アイデア出しが行われた。

➤ 多様な職業観の形成と体験機会

- 子どもは親の職業しか知らないことが多いため、多様な職業の大人が学校へ行き、複数回にわたって小規模な職業体験や講話を行う機会が必要。
- 親自身の職業観や知見が子どもの選択肢に影響するため、親に向けた職業情報の提供も有効である。
- 警察官の話を体育館で聞くだけでなく、実際に働いている現場も見たい。

➤ 定住促進と人口対策

- 夢を持つ基盤として、まずは若者がこのまちに住み続けることが重要。市内の大学生が卒業後も東大阪に住む場合に家賃補助を行うなど、定住促進策（人口減少対策）を行政に求めたい。

➤ 失敗を許容する文化

- SNSでのトラブルや失敗を恐れて萎縮するのではなく、失敗しても「次がある」と再挑戦を促せるよう、親子でメディアリテラシーを学ぶ機会や、チャレンジを称賛する環境づくりが必要。親もどう教えていいかわからない。

5. まとめ・次回に向けて

➤ ゲストからの総括

- 社会には多くの課題があるが、自分ごととして「どんな社会が良いか」を考えることは、自分自身の幸せを考えることに繋がる。小さな働きかけであっても「自分に何ができるか」を考え続けてほしい。

➤ 次回への展望

- 本日の議論で出た「安心安全の確保（マイナスからの回復）」と「夢への挑戦（プラスへの飛躍）」の両面を踏まえ、次回は行政に対する最終的な提言としてまとめていく。